



遥かな国の冒険譚

---

夏の日の青い空

---

雪村月路

---

この町で一番、体格が良くて腕っぷしが強いのは、明るい茶色の髪と目をした、鍛冶見習いのナツジだ。青年自警団の長をしており、働き者で、面倒見もいい。唯一の欠点は、むしゃくしゃすると喧嘩っばやくなることだ。

そして、ナツジは今日、この気持ちよく晴れた夏の日の午後、ゆえあって、まさに、猛烈に、むしゃくしゃしていた。だから、その様子を見て取った皆がこっそりと逃げ出す中、ずんずんと大股で道を歩いて行って、不運な誰かの肩にぶつかったときには、腹の底から轟く声で、

「おい、気を付けろ！」

と怒鳴ったものだし、相手が「ああ、悪い」と素直に脇にどいても、

「気に入らねえ！」

と、拳を握りしめて突き出したものだった。

ところが、ナツジの繰り出した拳を、相手はひよいと横にかわして、かすりもしなかった。抗議するように「おいおいおい」と言うのを見れば、この町の人間ではない。金髪に青い目の、見目良い若者だ。

ナツジは、有無を言わず二発目を繰り出した。若者は再び、すっとよけた。ナツジは少なからず驚いた――まぐれではなく、よけられているのだ、この俺の拳が。いや、もしかしたら、知らない奴だからと、自分が無意識に手加減してしまったのかもしれない。

ナツジは気を引き締めて、真剣に相手に向き直った。金髪の若者は、「何なんだよ」と、ぶつくさ言いながら、逃げる様子はみじんもない。ナツジはタイミングを見計らいながら、拳を次々に繰り出した。シュツ、シュツ。シュツ。すべて空を切る。おかしい。そんなことが、あつてたまるものか。

シュツ。シュツ、シュツ。焦るナツジとは反対に、相手の若者のほうは、なんだか楽しそうな様子になって来ていた。紙一重のところで避け続けながら、口元に笑みを浮かべている。シュ、シュツ。シュツ。シュ、シュツ。

どれくらいそうしていたものか。正直なところ、何がどうなったのか、ナツジにはよくわからなかった。ただ、相手が初めて素早く拳を突き出したのを見た、と思ったら、自分の体が宙に飛んでいた。

「あっ、悪い、つい！」

という、いくらか慌てた声を聞きながら――、ナツジの意識は、暗転した。

幸い、気を失っていたのは、ほんのわずかな間だけだった、らしい。

ナツジが路上で、手足の感覚を確かめながら上半身を起こすと、駆け寄って来た弟分の少年が、ほっとした顔で、

「大丈夫かい、ナツジ」

と声をかけてくれた。「ああ」とうなずきながら前方を見やると、目の前では、日ごろナツジを兄のように慕ってくれている町の若者たちが、あちこちから飛び出して来て、余所者に詰め寄っていた。口々に、「何をしやがる！」とか、「ナツジに謝れ！」とか、勝手なことを喚いているようだ。

金髪の若者はといえば、大勢に囲まれて閉口しながら、  
「わかった、わかった、悪かった。おい、放せよ」

誰かが若者を捕えようとしたようだ。ナツジはひやりとして、声を張り上げた。  
「みんな、やめろ！ 俺は何ともない！」

その場にいた皆が、ナツジのほうへと顔を向けた。ナツジは大声で続けた。  
「元はといえば、俺が売ったケンカだ。俺が悪かったんだ。これ以上、おまえたちが難癖をつけたところで、俺の恥の上塗りになるだけだ」

「へえ！ まともな話もできるじゃないか」

と、金髪の若者。「なんだと」「このやろう」と、周りの若者たちがいきりたつのを、ナツジは「よせ」と、たしなめた。さっきまでの、むしゃくしゃした気分は消えて、冷静に物を考えられるようになっていた。

もし、この美しい若者がもう少し短気だったら、今頃、ナツジと仲間たちは、こてんぱんに伸されて仲良く転がっているはずだ。そうっていないのは、ひとえに若者の度量のおかげ。そりゃあ、ナツジとしても、多少は腕に覚えがあるのに、かなわないと認めるのは癪ではある、が、今ここで出会ったのも何かの縁かもしれない、というのも――。

金髪の若者は、すたすたと歩いてきて、路上に座り込んでいるナツジに手を差し伸べた。

「まあ、俺も悪かったよ。大丈夫か」

「ああ。俺はナツジだ。あんたの名前を聞いてもいいか」

「ルーク」

「じゃあ、怒らないで聞いてくれ、ルーク。あんたの力を貸してもらいたいことがある」

「は？」

ルークは、手を差し伸べたことを後悔するような顔をしたが、ナツジは既に、その手をしっかりと掴んでいた。

「とにかく、ゆっくり話のできるところに行こう」

と言って、ナツジはルークを、開店前の酒場に連れて行った。

「おやっさん、場所、借りるぜ」

「はいよ。見慣れない顔を連れてるな」

「例の件で、助っ人を連れて来た」

「ほう！」

店のあるじは、カウンターから出て来て、テーブルに酒瓶と二人分のコップを置いた。

「店のおごりだ。昼間だから、こんなもんしか出せねえが、よろしく頼むよ」

「俺はまだ、受けるとも受けないとも」

呆れた顔のルークに、「いいから飲めよ」と、ナツジは片手で瓶を持ち、果実酒をついだ。

「実はな」

「うん」

と、ルークは、飲みものを口に運びながら、ともかくも耳を傾ける。

「おととい、貴人を騙る男が来た。いや、騙りだと思っているのは俺のカンで、証拠があるわけじゃ無いんだけどよ。それを言ったら、本物だという証拠だって無いんだからな。

そいつは、旅の途中で路銀が尽きたと言って、金を出せと言った。自分ちに帰ったら返して寄越すと言うんで、聞いてみれば、べらぼうな金額だ。しかも、美味しいものを食べさせるだの、女を差し出せだの、好き勝手を言いやがる。宿も気に入らないと言って、町長の家に押しかけて、今はそこに泊まっている。

そいつは剣を持っていて、そこそこ腕も立つんだ。とびかかった若いのを何人が軽くあしらって、奴は、金と女を用意するのに3日待つと言った。つまり、期限は明日だ。もし用意できなければ、力づくで奪って行くし、国の偉いさんに告げ口して、町に重罰が下るようになると言った。

町の住民は、それからずっと話し合っ、結論が出たのは今日の午前中だ。当たり前のことだけどよ、本物だろうと偽者だろうと、あれこれ差し出せと言われて、はいそうですかと渡せるわけがないんだ。だから、力づくで奪えるものなら奪ってみやがれ、総力戦だ。たとえそいつが、名乗ったとおりに本当に、リーデベルク国のフルート王子だとしても！」

飲みながら聞いていたルークは、げほげほと盛大にむせた。ナツジは眉根を寄せて、「どうした？」

「いや、なんでもない。そいつ、俺に似てるか？」

「ちっとも似てねえな。なんでそんなことを聞くんだよ？」

「似てれば、俺でも騙りが出来ると思ってさ」

「ばかを言え。で、手伝ってくれるよな？」

「そうだな」

と答えて、ルークはにやりと笑った。

「負ける気もしない。明日と言わず、今日これから殴り込みに行こうぜ！」

ナッジとルークは、そろって町長の家に入り込んで、厄介な滞在者を呼び出した。

居間に出て来た、自称「リーデベルクの王子フルート」は、痩せて青白い顔をしていた。「何か用か。期限の延長なら、聞かぬぞ」

物憂げに言う男を、ルークはじろじろと眺めた。男の髪は、褪せた金色。瞳は、薄い青色。口元は、人を見下したように歪んでいる。そう見て取ったルークは、不満そうに、「本物が迷惑するから、騙りはやめろよな。素直に悔い改めて退くなら、荒っぽいことは」「私は本物だ」

と、男は鼻で笑った。実際、育ちの良さを感じさせる風体ではあった。落ちぶれた旧家の出か何かかもしれない。だからといって詐称が許されるわけではなかったが。

「私を力づくで追い出そうというのか？ それなら、まずは私の従者が相手をしよう」

男が言うと、奥のほうから、ナッジと同じくらい体格のいい男が、腕をボキボキと鳴らしながら現れた。縮れた髪は金色で、瞳は薄い緑色をしている。

ルークが「え」と言って目を丸くしたため、ナッジは「おや」と思いながら、「そいつは俺が」と前に出た。だが、ルークは別に、怖気づいたわけではないようだった。

「なあ、もしかして、もしかすると、あんたは」

言いかけるルークを遮って、「従者」は野太い声で名乗った。

「王子の一の臣下、セレン・レ・ディアだ！」

「やっぱり！」

ルークは弾かれたように笑った。

「あはは、もう少し調べて来いよ、『セレン』！ 背丈しか合っていないぞ！」

「知ったことか！」

「従者」は吠えて、飛びかかって来る。ルークとナッジは身をかかわして、「ともかく、おもてに出て勝負しよう」

4人はなだれるように外に出て、自称「王子」は勿体ぶって剣を抜き――  
――決着は、あっというまについた。

「従者」のほうは、ナッジが投げ飛ばして、しめあげた。

「王子」のほうは、ルークと剣を交えて2合ももたず、すぐに「参った」と音を上げた。

おそらく、本物の貴人でないと割り切れれば、最初から、それほど恐れる相手でもなかったのだ。

「私たちは本物だ！」

と、後ろ手に縛られながら、「王子」は叫んだ。

「この町の者は、全員罰せられるぞ！ 今なら間に合う、縄をほどけ！ 褒美もやるぞ！」

「いいや、あんたらは偽者だ」

と、ルークは、きっぱりと言った。それから、ナッジに笑いかけて、

「俺は、町長と一緒にこいつらを連行して、役人と話してくる。今日は戻って来られないかもしれない。その間に、もし俺の友達に行き会うことがあったら、いきさつを説明してやってくれないか。セレンっていう奴。この町で落ち合うことになってるから」

翌日も、すっきりと良く晴れて、いい天気だった。前日の悪者退治のことで、ナッジの話を書きたがる者も多かったが、ナッジは遅れた仕事を片付けるべく、親方と一緒に鍛冶仕事に没頭した。

昼どきに、ふうと手を休めて汗をぬぐっていると、工房の開け放った戸口から、物柔らかな若者の声がした。

「失礼します。ここに、ナッジさんという方はいますか？」

「おう、俺だ」

と答えて振り返ったナッジは、びっくりした。なるほど、昨日の詐欺師が本物の貴人であるはずがない。本物の貴人とは、こういう者のことを言うのだ。

さらさらと長い金の髪。見るからに仕立ての良い、明るい緑色の服。戸口に立って首をかしげているだけなのに、優雅で、どう見ても一般人ではない。深い緑色の瞳でナッジを見て、若者は、にこ、と笑った。

「セレンといいます。ルークという友人のことを宿で尋ねたら、あなたを紹介されました」

「ああ、それは・・・」

ナッジは戸口へと向かった。そういえば、昨日の詐欺師の片割れも、セレンと名乗っていたっけ。リーデベルクでは、よくある名前なのだろうか。

近寄ってみると、若者はナッジと同じくらいの背丈だった。華奢に見えるが、かなりの長身ということだ。ふと、ナッジは昨日のルークの言葉を思い出した——「もう少し調べて来いよ、『セレン』！ 背丈しか合っていないぞ！」——

体格の良かった詐欺師の名乗りは、たしか——

「——セレン・レ・ディア？」

「はい」

ああ、やっぱり、貴族の若者だ。と、今さら思いながら、ナッジは少し緊張する。

「ええと、実は昨日、こんなことがあって」

ナッジは、ルークと一緒に偽王子と偽臣下を捕まえた話をした。髪の長い若者は、驚いた様子で話を聞いて、聞き終わると笑いながら感想を述べようとしたけれど、

「よう、セレン。ナッジも」

ひょいと、外からルークが顔をのぞかせた。

「やっと帰してもらえた。話、聞いたか、セレン」

「いま聞いたところ」

「ありがとな、ナッジ。すぐ発つだろ、セレン。馬を取って来る」

「うん」

ルークを見送って、セレンはあらためて感想を述べた。

「聞いた限りでは、偽王子のほうも似ていませんね。フルート王子は、なんといえいいのか・・・、そう、今日のような、雲ひとつない夏の空のような方ですから」

「ふうん」

ナッジは、よくわからなかったので、あいまいに返事をした。セレンは気にせず、

「では、これで。お世話になりました」

「あ、いえ、どうも」

ナッジはセレンの後ろ姿を見送って、工房で弁当を広げ、考えた。

もし、きのうの「偽セレン」が、今の若者の偽者だとするならば。「王子の一の臣下、セレン・レ・ディア」は、こんな異国の町角を、ふらふら歩いていていいのだろうか？ で、王子は「雲ひとつない夏の空のような方」・・・って、どんなだよ、さっぱりわからん。

どこまでも青い今日の空。ふと、ルークの澄んだ青い目を思い出す。はは、まさかね。そもそも、偽王子とちっとも似ていないし・・・待て。「偽王子のほうも似ていませんね」？

ナッジは、衝撃とともに思い出した。初めてルークに偽王子の話をしたとき、ルークが最初に言ったこと——「そいつ、俺に似てるか？」——！

「ナッジ」

「わっ！ ル、ルーク?!」

戸口に、彼が立っていた。陽光のような金の髪。迷いのない青い瞳。楽しそうな笑み。

「俺、行くけどさ、ひとつだけ。通りすがりに殴りかかるのは、やめたほうがいいぜ」

「あ、ああ・・・。そうだな。気をつける」

「じゃ」

と、軽く手を上げて。

本物の王子は、ナッジの視界から立ち去った。

輝く太陽と、雲ひとつなく晴れわたった青い空の印象を残して。

(完)

夏の日の青い空

<http://p.booklog.jp/book/99133>

著者: 雪村月路

著者プロフィール: <http://p.booklog.jp/users/ariadnemaze/profile>

ブログ: <http://snow-moon.cocolog-nifty.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99133>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99133>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社: 株式会社ブクログ